

「刊行によせて」地域再生の哲学を探して

近藤暁夫

本書は、二〇一八年一月二十七日（土）に開催された愛知大学人文社会学研究所主催の同名のシンポジウムの内容をまとめたものです。早いもので開催から一年以上が経ちましたが、登壇者のみなさま・関係者の方々にご尽力をいただき、この度このような立派な冊子として刊行できる運びになりました。

愛知大学人文社会学研究所は、「基礎研究」の充実を趣旨に設立され、「科学技術の進展と経済システムの高度化に伴い、地球規模で生じている、より根源的かつ普遍的な問題に取り組む」（公式HPより）ことを目的に活動をしています。その観点からみれば、今回のような研究者のカテゴリーには通常含まれない、実務の第一線で活躍されている人を集めてのシンポジウム企画を行うことは、いささか研究所の守備範囲外かとも思われましょう。もちろん、そもそも学問を「基礎」と「それ以外」に無理やり分けてしまうことが学術研究の本来の姿から遠い行為なのではないかと強弁することもできます。でも、だからといって「他の研究所でもできるシンポジウム」を人文社会学研究所が開催する特段の理由もないといえられないわけです。やるからには、さすが人文社会学研究所の企画だと思ってもらいたい。

そこで、今回は、えてして地域づくりの第一線の方を並べた企画が、ノウハウ伝授など即効性が期待される技術的要素を前面に出しがちなところ（ノウハウ伝授は大切ですが、それで終っては「もつたいたい」「感じもしますよね」を、折角なので彼らを突き動かす動機、実践の現場で鍛えられた人間性や哲学の部分に焦点をあて、地域再生の《哲学》とはどのようなものなのかについて参加者全員で考えようという趣旨での開催となりました。地域づくりなど一日二日でできるものではないことは、現場で長年活動されてきた第一号者であるほど身に染みて実感されているはず。だから、その人目を惹く美しい《花（成果）》≧だけでなく、更なる土台、ゆっくりじっくりと迷いながら学びながら手探りで進まれてきた、困難の中でも続けることができた、その人の《根っ子》の部分から考えてみよう。

その、シンポジウムの「狙い」が達せられているかどうかは、この報告書を手に取られた読者のみなさまの判断に委ねるほかありません。ただし、当日は多数の参加者を得て、熱気のあるシンポジウムとなったことだけは事実として記録しておきます。だからこそ、これは報告書を出さないわけにはいかない、という覚悟を決めて仕事を進めたわけでありまして。

もちろん、シンポジウムの成功は、ご多忙の中ちよつと変わった企画にも関わらず快く

お引き受けくださった登壇者のみなさま、企画の趣旨にご賛同いただき、準備と当日の運営にご尽力いただいた人文社会学研究所のみなさま、お寒い中シンポジウムにご参集いただき、率直なご質問を多数投げかけていただいた市民のみなさまのご協力あつてのものです。また、本書の巻末では、当日のコーディネーターをしていた内浦さんに、シンポジウムと登壇者（特に横石さん、木村さん）についての解説もご寄稿いただきました。

末筆ながら、関係のみなさまに改めて心からの感謝を申し上げます。
おかげさまで、すてきな冊子ができました。ありがとうございました。